ノスタルジー　―同志社大学の１１０年―

キャンパスめぐり隊	小枝　弘和〔こえだ・ひろかず〕
案内人紹介	同志社社史資料センター社史資料調査員

はじめに

同志社社史資料センターで社史資料調査員を務めております、小枝と申します。本日は、キャンパスめぐり隊にご参加のみなさんへの説明を担当させていただきます。よろしくお願いいたします。

これからキャンパスをめぐるにあたり、そのためのキーワードを設定しました。タイトルにある「ノスタルジー」です。この言葉は、郷愁や懐旧の念（『広辞苑』新村出編第７版　岩波書店　２０１８年　２２８６頁）などと解釈される、いわば懐かしさを感じる気持ちです。こうした気持ちが生じる基を考えると、２つの要素が考えられます。１つは、現存する建物などのモノや風景、もう１つは、既に失われたモノや風景の記憶です。前者はそこに存在することでノスタルジーを呼び起こし、さらに言えば、そのものが存在する限り、幾重にも世代を超えてノスタルジーを感じる象徴となります。後者は既に存在しない場合があります。しかし、そこに存在した時の記憶が、人々の心にノスタルジーを呼び起こします。世代は限定されますが、やはり懐かしさを思い出させる重要な要素です。このような２つの要素が含まれ、かつ、特有の第３の要素を生み出す存在が学校のキャンパスです。本学今出川キャンパスを事例にノスタルジーを感じるキャンパスとはどういうものか、いくつか事例を挙げて一緒に考えていきたいと思います。

重要文化財

同志社には５つの重要文化財があります。彰栄館（１８８４年）、同志社礼拝堂（１８８６年）、有終館（１８８７年）、ハリス理化学館（１８９０年）、クラーク記念館（１８９３年）です。いずれも完成から１３０年ほどを経ている建物で、完成当初からその場にあります。少なくとも、今ご存命で同志社出身者の方々であれば、誰もが一度は見たことのある建物と考えられます。現在、彰栄館は大学の中心的機能となる部署が、有終館は法人の中心的機能となる部署が、ハリス理化学館には展示施設が入り、同志社礼拝堂は諸行事の会場として、クラーク記念館は事務室、教室、礼拝堂を備えた複合的な施設として利用されています。これらは現在の姿であり、各々の建物は、その完成時には異なる性格を有していました。

彰栄館が完成した１８８４年（明治17）当時、同志社内の総学生数は２２９人、開校年度末の学生数12人と比べると、20倍近くの学生が在学するようになっていました。当時の同志社英学校は、基本的に全寮制（冊子「同志社規則」新島遺品庫資料上０１０４　１８７８年）で、今出川キャンパス移転時に建設された２階建ての第一寮、第二寮は、２階を寮、１階を教室として利用していました。当初の図面を参考に１人当たりの部屋の広さを簡単に計算すると１畳半程度でした（指図「寄宿舎部屋割図」新島遺品庫資料上０７４３　年不詳）。こうした状況ですから、寮と教室を確保することは常に課題となっていました。その過程で教室棟として彰栄館が建てられています。その後、彰栄館は、経済専門学校が岩倉キャンパスから引き揚げてきた時に使用され、その後、２０１０年（平成22）までは中学校が利用していました。

同志社礼拝堂は、新島が「同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者」（広津友信筆写「同志社創立十周年記念演説」新島遺品庫資料上００９４　１８８５年）と例えた、同志社の教育を象徴する建物として完成しました。礼拝も行われていましたが、大人数を収容可能な空間は、講演会や式典を実施する場としても機能していました。例えば、１８８９年（明治22）11月22日にアメリカ駐日公使R. B. Hubbardと児島惟謙（これかた）の講演会が開催されました。この時、人が集まりすぎたのか、２階が崩落する事故が起きたと記録にあります。死者はいなかったようです（『新島襄全集』５　同朋舎出版　１９８４年　４５９頁）。また、１９１２年（明治45）５月14日には、同志社大学開校式が挙行されました。式典に参列した大勢の人が席を埋め尽くしている写真が今も残っています。現代でも、様々な式典が行われています。結婚式も行われる場ですので、学校として公的に、関係者それぞれが私的に様々な想いを抱く代表的な事例と言えるかと思います。

有終館ほど多様に利用されてきた建物は同志社の中にないと思います。当初は、書籍館（しょせきかん）という名称で、図書館としての機能がありました。同時に、新島の執務室があったとも言われます。現在では、学校法人同志社の中枢を担う事務室などがありますが、戦前は学生が激増した大学を支える教室棟でもありました（拙著「第１章致遠館の沿革」『同志社大学致遠館調査報告書』同志社社史資料センター　２０２０年３月　10～11頁）。昭和初期には、昭和天皇ご大典終了直後の失火により、理事全員が総辞職する騒動の現場ともなりました。戦後は現在のような機能を持つようになりましたが、それがゆえに学生運動期には封鎖や座り込みの舞台となりました。時代とともに用途が変わり、その変化とともに様々な立場の人々が関わった、時代ごとに異なる価値を創出してきた建物が有終館です。

ハリス理化学館とクラーク記念館は、創建当時の同志社の最高の教育を象徴する建物でした。前者は中等教育を越えた教育を実践するハリス理化学校、後者も中等教育修了後の学生を主に対象とする神学校が利用しました。これらの学校は１９１２年、専門学校令によって開校された同志社大学に統合されますが、建物は高等教育の教室棟として使用され続けました。現在では、使用用途が限られてしまっていますが、同志社内の最高学府が使用し続けてきた建物であることは、その創建時から基本的には変わりません。

このように、形あるものはその誕生時から様々な使命を帯びてきていますが、そこにあることでキャンパスの風景と雰囲気を形成し、様々な人々が関わり、あるいは、重要な使命を帯び続けシンボル化することで、何世代にもわたってノスタルジーを惹起（じきき）するとともに、世代ごとに異なるノスタルジーを想起させる存在となりました。このようなキャンパスは日本全国でも、ごくわずかであると思われます。

遺構がつなぐ世代間コミュニケーション

ここで遺構を事例に話を進めたいと思います。京都市営地下鉄今出川駅３番出口を出ると、烏丸今出川の交差点の北東角に出ます。その交差点を東へ今出川通を少し歩けば、「同志社大学大学院門」の看板が掲げられた立派な門があることをご存じの方も多いかと思います。この門から左右に高い壁、いわゆる築地塀が伸びています。同志社大学の周りにある塀の中で、この箇所だけが異質な空間になっています。門を入ると図書館があります。図書館と門のコントラストは不自然に感じられます。今の図書館は１９７３年（昭和48）に完成しました。その前年までは啓真館という木造２階建てで、正面に車寄せを備えた、一般の家屋ではちょっと見られない建物がありました。この建物は、もともとは華族会館（現・霞会館）京都分館です。華族とは公家や藩主など、明治時代以前の社会的地位や身分により、明治時代の華族令に依って爵位を与えられた人々を指します。その方々が組織した団体が華族会館です。

華族会館に属する人々のなかでも、公家をルーツとする人々にとって華族会館京都分館は、京都に存在するという意味で特別でしたが、戦後間もない１９４７年（昭和22）にＧＨＱの占領下で接収されます。その頃ちょうど、隣接する同志社大学では、復員する学生らとともに、戦後の進学率上昇により進学者数が急激に増加している最中でした（大学生数を事例とすると１９４５年２３２５人、１９５２年８６１８人）。そのような折、学内外で接収されていた分館買収のための募金運動が展開されます。そうした積極的な行動ののちに、キリスト教主義学校でありながら、京都の伝統文化を引き継いだ建物を入手することになりました。１９５３年（昭和28）には同志社は分館を入手し、３月には啓真館と名付け、大学院が移されました。その名残が、今出川通沿いの門であり、そこに掲げられている看板が「同志社大学大学院」です。

啓真館は１９７２年（昭和47）まで存在し、その後、その敷地には３代目の図書館が建設されました。啓真館が校舎として機能した期間は19年間ですが、まさにこの時期は高度経済成長期と重なります。この間、学生数はさらに倍増していました（１９５３年９４８７人、１９７２年１９１８４人）。今からおよそ50年前は、「一億総中流」という言葉が世の中にあふれ、経済的な豊かさとともに到来した進学熱が大学にも押し寄せた時代でした。そうした中で多くの同志社の学生・生徒が目にして、人によっては利用した建物です。現在は図書館西隣に記念の木製扁額「啓真館」と破風、獅子口（鬼瓦）を遺すだけ（２０２２年11月11日現在、図書館の建て替えに伴い扁額のみ２０２３年８月８日同志社社史資料センターが受入）ですが、築地塀や門が往時を知る人々に様々な想いを想起させますし、建物が失われた後も築地塀や門が残ることで広い世代のノスタルジーを刺激し、世代を超えたコミュニケーションが発生する可能性を感じさせます。世代間ギャップを埋める一つのツールとして歴史を利用できる事例かと思います。

引き継がれる館名とその意義

続いて弘風館、至誠館、致遠館を紹介したいと思います。現在、これらの名前を使用している建物はいずれも２代目となります。弘風館は、１９５９年（昭和34）、至誠館は１９６７年（昭和42）、致遠館は２０２１年（令和３）に竣工しました。

これらの建物のうち、致遠館は事務棟、弘風館と至誠館は教室棟です。後者２棟は、一瞥（いちべつ）すれば明らかですが、鉄筋コンクリートの建築物です。いずれも高度経済成長期、つまり、大学の学生数が激増している最中に誕生しました。言い換えれば、キャンパス狭隘化（きょうあいか）の緩和、大学設置基準順守のために建設されたとも言えます。逆に言えば、初代のそれぞれの建物では、その役割を果たすことができなかったと言い換えることもできるでしょう。

実際、初代弘風館と至誠館は、基本的には木造の２階建ての建築物でした。２代目と比較すればその階数だけで異なりますので、初代の建物の延べ床面積が２代目よりも相当狭かったことは想像に難くないと思います。しかし、建設当初は必要とされた建物でした。

初代弘風館が建設された１９２１年（大正10）という時期は、戦前期において学生が激増した時期にあたります。１９１２年に専門学校令によって大学を開校した同志社は、１９２０年（大正９）には大学令によって大学をもう１つ開校します。弘風館が建設された時期はまさにこの直後でした（１９２２年に専門学校令による大学が専門学校と名称変更し、大学が２つ存在する状況は解消）。単純に学校が増えましたので、戦後ほどではありませんが学生数が急増していきます（同志社の総学生数１９１２年８６０名、１９２０年１８１２名、１９２９年３６７３名）。かつて例を見ない学生数の増加に対応するために、先に述べた通り、重要文化財に指定されているレンガ建造物は軒並み大学および専門学校のための校舎として利用されるようになりました。しかし、これだけでは足りません。大正デモクラシー、あるいは大戦景気を背景に、人々はより高い教育を志向するようになり、同志社では毎年１００人～２００人規模で学生数

が増えていきます。既存の建物だけでは、キャンパスの急速な狭隘化を止めることはできません。特に大学および専門学校の学生らを収容し、多様な学部の授業を展開するための教室が必要となりました。こうした状況を背景に建設された教室棟が弘風館と至誠館です。双方ともに、大学予科生（当時の大学は本科３年制予科３年もしくは２年制）の教室棟として誕生しました。つまり、弘風館と至誠館は建物の規模や外観は異なっても、その役割は同志社の高等教育の実践の場という意味では変わりません。建物そのものが変わってしまったとしても、名前とその役割が受け継がれているという事例です。これが第３の要素です。外見が変わったとしても、等しく高等教育を受けた、という経験を共有することは世代を超えても可能といえるのではないでしょうか。

同時に弘風館と至誠館の事例は私たちに歴史をどう残すか、その方法を考えるうえで示唆を与えてくれます。ここまでお話しさせていただいたことからお分かりのように、戦前と戦後では同じように学生数が増えたとしても、その規模が異なります。よって、戦前の収容人数を想定して建設された建物は、戦後の学生数の激増期に対応可能なキャパシティを持ち得ていません。また、日進月歩で日本社会を支える様々な技術が進歩しています。建物の工法、耐震性、建材などを含めた技術が日々更新されています。同時にこのことは、建物は完成したその瞬間から劣化し、陳腐化していくことを意味しています。年月を経るだけ歴史の重みが加わることはその通りですが、現代人にとっては最新の設備や施設と比べるとどうしても見劣りしますし、入学希望者の学校選択にすら影響を与える可能性があります。建物の歴史的意義と利便性は反比例の関係にあります。だからこそ、歴史を重ねれば重ねるほど、建物を残すことは生産性を伴わない限り非常に難しい選択だと言わざるを得ません。

このジレンマの代表例が致遠館だと言えるかと思います。現在は事務棟となった致遠館は、２０１９年（令和元）に解体されました。解体直前も事務棟として使用されていました。いつから事務棟として利用されていたかは定かではありません。しかし、初代致遠館はその誕生時には明確な役割がありました。初代致遠館は１９１６年（大正５）に完成したレンガ建造物でした。その役割は「大学政治経済部及英文科教室」と当時の理事会記録に明記されています（拙稿「第１章　致遠館」『同志社大学致遠館調査報告書』同志社大学同志社社史資料センター　２０２０年３月　８～９頁）。つまり、致遠館は同志社で初めて大学を名乗った際の専用校舎として建設されました。この意味で致遠館には大学教育を象徴する最初の建築物という普遍的価値がありました。加えて、致遠館の北側には木造の教室棟である初代徳照館が同目的で同時期に建設されました。この２棟が大学教育の始まりを象徴する建物でした。

徳照館は戦前から戦後まで高等教育の教室棟であり続けましたが、１９５３年（昭和28）に取り壊され、名前は研究室棟に受け継がれ現在も残っています。一方、致遠館は当初の姿のまま２０１９年まで残り続けました。致遠館の設計がヴォーリズ建築事務所である可能性が高いこと、同志社の高等教育を象徴する建物であることなどを考慮すれば、致遠館の文化財的価値の有無は言うまでもありませんが、現代の建築技術や設備の進歩などと照らし合わせると、脆弱性や合理性を著しく欠いてしまうことも事実かと思います。この相克の中で最終的には外観は初代を踏襲し、同じ場所で建て替えられました。致遠館のように、判断が難しい問題が今後もキャンパス内で発生することが予想されます。

かつての建物は存在しないけれども、名前が残っている建物に関して話をさせていただきました。名前が受け継がれ、役割も受け継がれている建物もある一方で、名前だけがかつての役割を受け継ぐ証として残されている事例もありました。特に後者に関しては戦後間もない頃まで利用されていたこともあり、中には昔話として教室利用をされていたと聞いたことがある方もいらっしゃるかもしれません。遺す方法は様々ですが、その遺したものにどのような意味が含まれているかを知ることで、世代を超えた共有可能な想いを新たに見つけ出せるのではないかと思います。

おわりに―同志社大学の１１０年

最後に話をまとめて終わりたいと思います。本日のテーマの副題に「同志社大学の１１０年」という言葉を付しています。今から１１０年前といえば、１９１２年、ちょうど歴史上はじめて同志社大学という名前の学校が誕生した年です。そして、本日話に登場した重要文化財５棟、啓真館、弘風館、至誠館、致遠館などすべてが同志社の高等教育を支えた建築物でした。それゆえに、卒業生や関係者が建築物や遺構、建物名に触れることで世代を超えて１つの価値を共有できるもの、互いの想いを共有できるきっかけが存在すること、その橋渡しを歴史が担う可能性があることを感じていただけたのではないかと思います。このような視点をもってキャンパスの建築物や遺構を見たときに、私たちには独自のキャンパス観が創出できるのではないかと思います。

もう１点、重要な視点は何をどう残すのか、時代に見合った方法を考えていかねばならないということです。デジタル時代になり半世紀以上を経ました。現在ではメタバースという言葉も、もはや日常になってきました。目の前にある確かに存在するものだけがノスタルジーを呼び起こす対象ではなくなりました。日進月歩の科学技術や成熟する現代社会がもたらす様々な影響が、私たちの価値観を何度もアップデートしていきます。そうした中でも変わらないもの、受け継ぐべきもののあるべき姿を考え、残していく方策を考え実施し続けていくことが必要だと個人的に思います。

長い間、ご清聴ありがとうございました。

〔参考文献〕
・河野仁昭　『キャンパスの年輪―同志社今出川校地―』　同志社大学出版部　１９８５年
・認定ＮＰＯ法人古材文化の会編　『同志社大学致遠館報告書』　同志社大学同志社社史資料センター　２０２０年
・展示図録　『ハリス理化学館同志社ギャラリー第16回企画展　学徒出陣75年　私学と兵役―同志社の学徒出陣』　同志社大学同志社社史資料センター　２０１８年
・展示図録　『ハリス理化学館同志社ギャラリー第24回企画展　旧制から新制へ―同志社大学の挑戦―』　同志社大学同志社社史資料センター　２０２２年11月21日
・同志社社史資料センター　「特別寄稿　同志社大学商学部１００周年記念～写真とともに見る同志社大学商学部前史～」『同志社時報』　Ｎｏ．１５４ 学校法人同志社　２０２２年10月
・各年度の事業報告（同志社社史資料センター所蔵分）

掲載写真はすべて同志社大学同志社社史資料センター所蔵

２０２２年11月11日　同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川校地「キャンパスめぐり隊」記録

※図の表示はホームページでは省略します。